



# 基 調 講 演

“高齢者の知恵・後継者の発想で地域づくり”

肥 後 利 治 氏

(北山校区地域コミュニティ協議会会長，始良市社会福祉協議会会長)



ただいまご紹介いただきました、始良市の肥後でございます。

地域的には、県民の森をご存じだろうと思いますが、県民の森を抱えております地域でございます。校区的に面積も始良市内で一番広いところでございます。そのような中でさまよっている住民、これを何とかせにゃいかんということで携わってきたわけでございます。

先ほど表彰を受けられました7団体の皆様、本当におめでとうございます。先ほどこちらのほうで事例発表等を聞かせていただきまして、非常に感動いたしました。そしてまた、素晴らしいリーダーの方々がいらっしゃるんだなと考えております。

そのような中で、この4年間、地域づくりへ取り組んだことが、参考になるかどうか分かりませんが、現在もそれぞれの地域で、団体、自治会、公民館あるいは町内会等で一生懸命頑張っているのに、平成17年度、国・県で共生・協働推進策が叫ばれていることを、私ども県民として理解していく必要があるのではと考えております。

地域を思う気持ちと地域住民との関わり合いの中で、リーダー的存在が生まれるかどうかでその地域が動くんだということを申し上げて、一部と二部、一部の方は私どもが取り組んできました事例発表。これは、あくまでも地域づくりの仕組みでございます。地域づくりと言いますのは、やはり、一から、最初からできるものではございません。何か小さなことから始めて、そして地域ができていくんだということをご紹介させていただきます。

私ども、平成20年度、旧始良町の中で校区ごとの地域づくりの策定委員会を開催いたしました。1年かけて各校区で取り組んだんですが、その中で、山間地の一部であります私どものところから出てきたのが、やはり拠点が欲しいということがございました。その拠点の中で、お聞きになったかもしれませんが、北山茶屋というのができたわけでございます。

先ほど申しました私どもの地域は、今現在460名、高齢化率63%を超えております。そのような中で地域づくりを何とかしてみたいと思ったのが、後で出てまいりますけれども、ご紹介させていただきたいと思っております。

これは旧の地域の組織でございましたけれども、私ども、北山区と木津志区という区の、区制が邪魔をしております、私どもがまだ若いころから、区が1つの核になって動いていたわけ



です。だけれども、この区で一緒にやろうということはなかなか難しかった。そこに私、平成17年度自治会長を拝命いたしまして、北山校区自治会長連絡協議会あるいは行政連絡員協議会、これを作りまして、この相中に入ったわけでございます。

私どもの集落は4集落に分かれておりまして、学校も3つございました。だけれども、それが昭和43年統合したんですけれども、この地域がそれぞれ何もしていなかったわけじゃないんですね。木津志地域、北山上地区、中地区、北山下地区ということで、それぞれのいろんな伝統等を守り抜いてきているわけでございます。

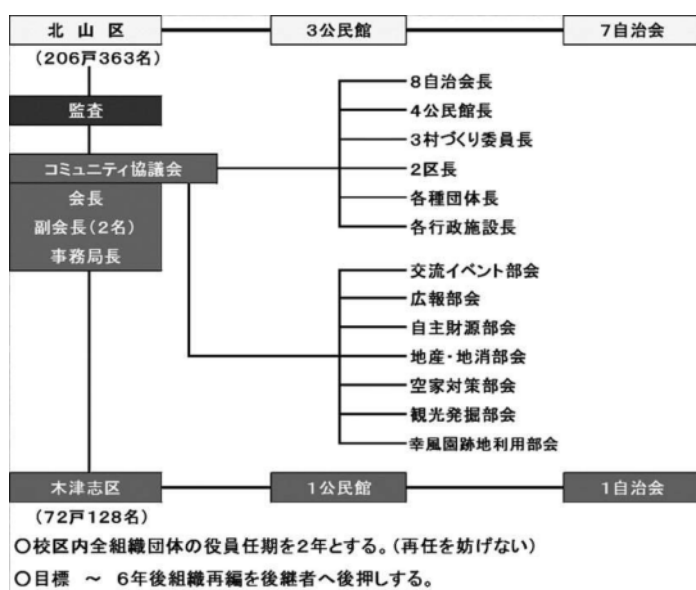
校区行事といたしましては、先ほどありましたように、いろんなことをやっているわけですが、地域でこういうことを地域ごとにやっている。だけれども、これが今できなくなりつつある。じゃ、どうしようか。やはり若者が帰ってこないということだったわけですね。

平成20年度、ちょうど地域活性化策定委員会をやっています時に、鹿児島県のほうに故郷創生塾というのがございまして、これに参加をさせていただきました。その中で、豊重会

長さんとお会いしまして、この豊重会長さんが私に二言、言いました。「肥後さん、動けば奇跡が起こるよ。」「地域が動けば行政が動くよ。」この二言だったんですね。これが私の心を非常に感動させていただきました。この受講が終わった時に、自分で立ち上がってみようと思ったわけでございます。

組織を作るときに、私どもの北山校区にはこれだけの組織があるわけですね、そして32番目から40番目までは行政の施設でございます。これもひっくるめて、じゃ、地域づくりを何とか考えてみようということに至ったわけでございます。そして、このような組織を作りました。コミュニティ協議会、これは自治会長さん方を中心に、両区長さんを副会長に持ってきて

1 北山区長	21 民生委員・児童委員×4名
2 木津志区長	22 高齢者クラブ会長×4名
3 北山上自治会長	23 婦人部長×4名
4 中甕自治会長	24 北山校区各自治会役員×6名
5 木津志自治会長	25 北山校区青少年育成協議会長
6 宮脇自治会長	26 木津志簡易郵便局長
7 馬場自治会長	27 北山いちご生産組合
8 北野自治会長	28 北山農産加工センター長
9 山元自治会長	29 竹林振興会長
10 石ヶ迫自治会長	30 森林組合理事
11 下組公民館長	31 北山校区学識経験者×2名
12 木津志村づくり委員長	32 北山診療所 所長
13 北山上・中 村づくり委員長	33 北山小学校 校長
14 北山下 村づくり委員長	34 スターランド始良 所長
15 北山校区体育振興会長	35 北山野外研修センター所長
16 北山校区社会福祉協議会長	36 北山伝承館 館長
17 木津志消防分団長	37 草文美術館 館長
18 北山消防分団長	38 北山小学校PTA会長
19 農業委員×2名	39 北山小学校児童維持委員会
20 北山校区体育指導員×2	40 北山小学校同窓会長



作ったわけです。だけれども、右の方に伸びている上の段は既存の組織、それから私どもが作りましたコミュニティ協議会が下において右の部会、一応これでやろうということになったわけです。

だけれども、目標を持ちました。校区内の全体の組織、それぞれ任期があるわけですがけれども、役員の任期を輪番制とかそういうことじゃなくして、とにかく2年に揃えようということで揃えたわけです。再任は妨げない。そして目標、21年度作った時点で6年後にはこの組織を再編成し、そして後継者に渡すんだということを目指しているところでございます。それがもう5年目に入ったわけですね。

会議を重ねました。キーワードが出てまいりました。「じゃ何から始める。」「うん、何からしらうかな、課題はたくさんあるよね。」と話していく中でキーワードが出てきたのは、「じゃ、まず人を集めようよ。」ということから始まったわけですね。そしてフロー図ができてきて、今このフロー図に向かって一生懸命1つずつクリアしているところでございます。昨年度まで、福祉部門と子ども部門に手がつけられなかったんですけども、本年度やっと手をつけることができました。

先ほどの拠点ですが、簡易郵便局の跡だったんですね。10坪程度だったんですけども、コミュニティ協議会を立ち上げたとき拠点が欲しい欲しいということを盛んに叫んでいましたら、持っていた人が「もうあげるよ、これを使ってよ。」ということになったわけですね。「それならもらっていいですか。じゃ、我々の拠点にしようよ。」ということで、地域の高齢者の方が「せっかく作るんだったら、竹小屋にしようよ。」という話になってそのまま進んでいったわけですね。作業をしているのはそのときの役場の職員のネットワークとか、そして地域の若手の委員とかでそういうことが始まったわけです。

感動したのは、何も言っていなかったんですけども、何となく女性の方々が集まって炊き出しが始まっていました。これには、非常に感動したところでございます。

そして、このような立派な拠点ができたわけですね。旗が「しきおり」と出ていますけれども、市内の大きな学校の校長先生の奥さんとか、そういう2人の方が「うちらにも手伝わせてよ。地域づくりをさせてよ。」ということで入ってこられて、古民家を探しておられたんですね。だけ



ども、古民家はなかなかいい所がなく、これができ上がった途端、ここに来て、「もうここでいいわ。」という話になったわけです。こうして、ここで「しきおり」ということで、地元の食材を使ったヘルシーな食事、これは男性の方にはちょっと物足りないかもしれませんが、女性の方々には非常に好評を得たところでございます。

今、ここにありますように、メニューは決まっておられません。その日にある材料を使いますので何が出てくるかわからない、こういうことでございます。そうしているうちに、メディアで取り上げていただきまして、これはお尻をたたかれているなという形で進めていったわけでございます。

七夕祭り。これには5万円もかかっていないんですね。この祭りには、みんなにボランティアで来ていただきました。この踊りなんかは、串木野から1団体にボランティアで来ていただきました。そういうことで七夕祭りですね。



次に、もう何か月もしないうちに出てきたのが、ちびっこソフトボール大会。これは何でかという、会場的にはそんなにいい会場はないんですけども、「北山に人を集めるためにはこれをやればいいが。」ということでみんながやろうと言って、「山の中でするんだから、レギュラーの選手はいつも試合しているから、補欠の選手を主体にした大会にしようよ。」ということでやりましたら、非常に監督さん方に喜んでいただきまして、鹿児島からも4チームか5チーム来ていただきました。そういう中で、ちびっこソフトボール大会が始まったわけですね。

8月13日、お盆でございます。これはもうずっと続いている伝統行事でございますが、やはり山間地域。子どもがお盆に帰ってくる、孫が帰ってくる、親戚が帰ってくる、そういう方々のための一夜の楽しみということで祭りをやっております。

先ほども出てまいったようでございますが、要請したわけじゃないんですね。地域が少しずつ何かを始めれば、観光ボランティアの人たちが「北山が何か動いているね、



じゃ、ちょっと行って、校区内の史跡やら歴史を調べてみようよ。」ということになったわけです。この方々が調べてくれているおかげで、北山校区内の素晴らしいマップを今作っているところでございます。

これも発信されまして、メディアの力というのはすごいもので、特にNHKテレビ、TBS系、MBCさんで全国放送されました。その中で、後で出て参りますが、地域出身者の方々が、都会の中で地元のふるさとが動いていることを見てUターンを始めております。

北山には診療所があるんですが、ここの先生が非常に地域医療を熱心にされておられてまして、鹿児島大学の医大生が今まで離島に研修に行っていたんですね。地域医療として。それを北山に誘致をしました。そして、まだ若い学生さんたちですが、この方たちに私どもが何を期待しているかという、診療所がありますので、やはり将来の医師という形で帰って来てもらいたい。あるいは、この中で1人でも2人でも地域医療というものに関心を持ってもらえればありがたいなど。

地域住民がとにかく地域を印象づけようということで、アユの石焼き等を振る舞っているところでございます。そして地域内を回って、これは牛舎で150頭やっております。左下は昔ながらの豆腐を作っている店もございます。こういうことで学生さんたちに印象づけていこうと。これもメディアに取り上げられました。地域住民の方々が、自分の子どもあるいは孫みたいな若い学生さんたちと、楽しく過ごしていることを取り上げられたわけでございます。

これ(北山校区だより)はもう今、8号、9号まで出していますけれども、地域住民、ご高齢の方々に、地域で今、何をやっているんだということをお知らせしているところがございます。

やねだんに行きました。やねだんにいつ連れていこうかなという気持ちでおったんですが、やはり地域づくりというものに取りかかって、まず少し、かかじってから連れていった方が



効果があるんじゃないかということで、1年経ってから連れていったところ、地域住民が非常に感動しまして、それから協力体制がすごくできてきたところがございます。

そば植えが始まりました。荒廃地等の活用を挙げていましたので、ここは4反歩なんですけど、草やぶのここにそばを植えよう。

ここはちょうど水がないんですね。田んぼだったんですけれども、田んぼを作るときは川から引いて水を送っていたところです。かねては水が来ないものですから、ここなら適しているだろうということで、地主さんから借りました。

このようにきれいな畑になりました。これも最初に「そばを作るよ。」と言った時に、「素人が作ったって何になるもんか、できるもんか。」と言われてまして、この時は私が真ん中に挟まれて非常に困ったんですけれども、1年目はやはり先ほど言いましたように市役所の職員とか、ネットワークさんとか、地元の若い人とかいうことでやったわけですね。

そばが実ってまいりました。素人ながら収穫もやっております。

これは2年目に入りました。きれいな畑になったわけですね。そうすると、みんながそれぞれ参加してくれるようになったわけです。非常にすばらしい光景で、難儀をしたことを今、思い出しております。

そば打ち体験。収穫ができれば、そば打ち体験ですね。後で出てまいりますが、23年度にそば打ち体験を始めました。23年度は100名の方が集まり、24年度は130名が集まって、そば打ちをやっているところでございます。今、メディアに出た時点で県が取り上げてくれてまして、そばの里づくり、後で出てまいりますが、これが始まったわけでございます。



飛び飛びになりますけれども、地域住民が愛している烏帽子岳という山が、ちょうど、さつま町との境にあるわけですね。ここが非常に眺めがよくて、いい場所なものですから、地域住民がすごく愛している。何とかできんかな。「じゃ、どうする、誰がする。」となった時に、「じゃ、消防団をみんな集めようよ。飲ん方をするが。」と、

飲ん方をしました。ちょうど、みんながほろ酔い気分になった時にこの作業の話をしたら「するが、するが。」と、みんな酔っ払っているものですから「するが、するが。」となりました。北山校区の消防分団員です。これを動かしたんです。これを動かしましたら、今度は地域出身者がコンボを貸してくれたりとか、いろんなことをしてくれました。このように、少しずつやっていきます。

そして、ある日突然、豊重会長がひょこっと私のところへ来ました。ここの100円売り場を見て、「肥後さん、似顔絵を描けばよ。」と言われてました。ちょうど困っていたことがあったものですから、「そうか、似顔絵を描けばお金が入っかね。」と思ったんですね。豊重会



長が「似顔絵を描けば話題になるよ。」と。これがうまく一致しまして、似顔絵を描きました。これはやねだんの画家さんに描いてもらったんですね。ちょっと高かったですけれども、これは油絵なんですね。まだ色は全然変色しません。そしてお金が入るようになりました。すばらしい豊重会長の発想ですね。



こうして今現在、120団体の方々が県内各地から視察に訪れていますけれども、空き家対策第1号ができたんですね。真ん中の女性の方が陶芸家ですね。決して私ども地域で「来てください。」とか、呼んだわけじゃないんですね。呼んだわけじゃないんですけれども、「北山で陶芸をしたい。」ということで来ていただきました。

北山の烏帽子岳の下の、始良市のちょうどさつま町との境のところに一軒家がありました。20数年住んでいない家ですね。ここに地域の若い人、50代の人たち2人が何やらやっていました。私はちょうど通ったものですから、「何しているの。」と言ったら、「これをいけんかすれば、人が住めないだろうか。」という気持ちでやっておられたんです。「材料はどうしたの。」と言ったら、「材料は、自分たちで買ってきてやっている。」「それならその材料代は補助をするから。」ということで、今、1世帯が住んでおります。

こちらは廃屋寸前ですね。アパートがございましてけれども、以前施設があったんですが、自立支援法等と、そして建物の耐久性等々で、北山のその施設ではもう無理だということで、移転をされたんですけれども、このアパートだけを残されていったんですね。これはグループホームの施設だったんですけれども、付き合いで買われたという家主さんが来られましたら、「ここを買ったのはいいけど、何をすることもないね。」という話になって、「じゃ、地域に貸してくださいよ。」という話になったんですね。今、ここに3世帯15名が住んでおります。

そしてこの上の方は、言えば荒地だったんですけれども、「これも何とか畑にして、そばでも植えよう。」ということですね。こういうのは本当に高齢者の方々の知恵なんですね。その知恵を引き出すためにどうするか、先ほど本当に素晴らしい発表をいただきましたけれども、まだまだ心の中には知恵袋があると思うんですね。高齢者の方々がその知恵を本当に出してくださる地域というのは、どんどん、どんどん前に進んでいきますけれども、やはり恥ずかしさ、あるいは声を出せば「俺が難儀をせにゃいかんどね。」というような形になっ

ていくと思います。

いろいろと出ていますが、「故郷へ桜の花を咲かそう事業」。撤退した施設の跡に、今、市有地になっているんですけども、「ここに桜の花を50本ぐらい植えさせてください。」と許可をいただきまして、桜を植える。オーナー制にしよう。そのオーナーの名前を誰にするか。自分たちの子ども、お孫さんですよということにしました。ということは、今度は自分の子どもや孫の名前でしておけば、自分の桜の木がここにある。帰ってくる機会を増やそうというのが1つの狙いでございます。

先ほど申しました、そばの里づくりの支援ということで、モデル地区の1つに選ばれました。反歩数はこの6地区の中で一番少ないんですね。1町5反歩しかないんですが、モデルとして認定されましたので、これも地域づくりの一環だな、そばで何かができないかなということで動いたわけでございます。

東京からUターン者が帰って参りました。まだ52歳ですね、今。お父さんが弱って、田んぼが2反ちょっとありまして、それをするために帰ってきたんですが、「北山に帰ってくるにはやはり1年間収入がないと。私なんかはまだ子どもがいるから食えないよな。」という話になりました。「それは何とかせにゃいかんね。」という話をしている中で、これはナタマメなんですね。ナタマメに目をつけて、今、一生懸命やっております。

右下の方が、道路沿いですので、地域住民が通りますと、暇のある人はみんなが寄って手伝ってくれるんですね。その中で、またこうして昼ご飯を作ったりしてくれる人がいるわけです。こういうのが何かのどこかで、私どもが自分から「こうしましょう、ああしましょう。」と言っているわけではないんです。自然体の中でこういうことが起こり出しているということですね。

先ほど出ました「しきおり」。これがおととしの11月に、団体が多く来るものですから「もうちょっと広いところを、県民の森の食堂が空いているから、そこを県と交渉してみようよ。」という話になりまして、そして市の職員も一緒になって県と交渉して、県民の森の食堂に「しきおり」が移転したんですね。そして、ここが空きました。空いたら、そば作りをして、そばができ上がったものですから、「もうここで、精米機もあるし、自分たちで打って出せば、1年間販売できるぐらいはあるんじゃないの。」と、6次産業ができました、一遍にですね。

だから、やはりこれも高齢者の方々の知恵なんですね。これを言ってくださったのは、精米機を持っている高齢者の方が、「うちでひくよ、あそこでそば屋をすればよ。」という話が私どものヒントになったんですね。「それなら、そば屋をしようよ。」と言って、今、ま